

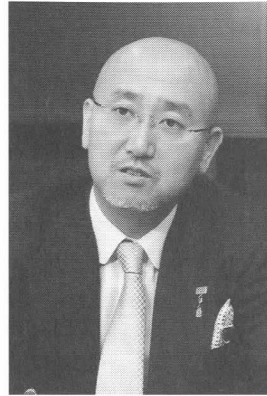
志の公認会計士

久野康成の

「私なら、こうする！」

第70回

非常識な実践経営アドバイス



Question

学生起業家として、自分がつくった会社で経営を続けるか、就職するかで迷っています。

(東京都 大学4年生)

Answer

若さゆえの体力と気力があっても、デメリットも

人生は選択の連続です。どの大学に入るか、どんな企業に就職するかで、その後の人生は大きく変わります。1つのケーキを食べるか否かがダイエットの成否を決め、糖尿病になる確率

を変え、ひいては人生の長さを変えるかもしれません。人生の小さな選択ですら、後々、大きな変化を生むような「バタフライ効果」(ブラジルの蝶の羽ばたき)がトルネードを引き起こす)がないとは決して言えないでしょう。ましてや、学生起業家になるか否かは大きな決断で、今後の

人生に多大な影響を及ぼすことは間違いありません。

また、人間は、なまじ得意なものがあると、それを選択しがちです。選択した結果、もっと大きな可能性をつぶすこともあるかもしれません。私は、小学生の時、町の祭囃子で三味線を弾いていました。大人から、「おまえは、三味線がうまいから、ちゃんと先生について稽古をすれば、将来三味線で食べられる」と言われたことがあります。本

当に選択しなくて良かったです。もし、選択していれば、今頃、どんな人生を送っていたことでしょう。

さて、学生起業家として有名な創業経営者には、リクルートの江副浩正氏、パソナグループの南部靖之氏、ソフトバンクの孫正義氏など、個性的な経営者が多くいます。そういうえば、ライブドア創業者の堀江貴文氏も学生起業家です。学生として起業すること自体は、決して悪いわ

けではないと思います。

では、学生起業家を選択すべきか、メリットの前にデメリットを検討してみましよう。

第1は社会人経験です。経験は、その年代でなければできないものがあります。新卒としての下積み経験もまた、その後の人生の豊かさにつながります。経営者の子息として生まれても、直ぐに親の会社には入社せず、取引先などで下積みをするのは、幅の広い経験をするためです。経験には、深さと広さがあります。初めは広い経験をし、やがて自分の専門分野に集中することによって、経験に「深み」が増します。下積みを経験せずに起業することはある意味、効率的ですが、人生は非効率なところにも意義があります。

「迷いがあるならば起業家としては時期尚早か」

第2は資金です。経営には、元手が必要です。資金が乏しい状態で企業経営をすると、どうし

ても会社は小さくなります。資金が少なければ、戦略を実行する際の選択肢の幅が小さくなります。

特に世の中に認知されていない新しいビジネスをする場合、市場開拓にかなりの時間を要することがあります。自分が想像するより早く資金が枯渇することもあります。大器晩成ということわざがありますが、世の中に打って出るのも「時機」が重要になる時があります。

第3は信用力です。年齢と信用力は密接な関係があります。経験の乏しい若い経営者に積極的にお金を貸してくれる銀行は少なく、自分の手持ち資金で経営をせざるを得ない期間が相当続く可能性があります。

学生起業のメリットは、第1は体力です。20代は、バイタリティーに満ちあふれる時で、苦難も体力で乗り切ることができ、かもしれません。

私が起業したのは、32歳の時でした。若すぎず、それなりの経

験と資金を持つての独立ができましたが、今思えば、体力的にも充実していました。40歳を超えてからの起業は、肉体的にきつくなり、経験がありながらも結果として、会社を大きくできない経営者が多くいます。経営力の最も基本となるものは、経営者の体力かもしれません。体力とモチベーションには強い因果関係があると思います。

最後に、学生起業家としてのメリットは、何といたっても今持っているアイデアを今すぐ実現させることができることです。経営には、時機と同時にスピードもまた重要な要素です。スピードは、チャンスを逃さないための最も重要な戦略です。学生の状態で起業するスピード感、多くのデメリットを補うだけの価値はあります。

[プロフィール]

久野康成(くの やすなり)
公認会計士。人財開発・東京コンサルティングファーム会長兼 CEO。東京税理士法人統括代表社員。1965年生まれ。愛知県出身。滋賀大学経済学部を卒業後、青山監査法人(プライス ウォーターハウズ)入所。監査部門・中堅企業経営支援部門にて、主に株式公開コンサルティング業に携わる。98年久野康成公認会計士事務所を設立。東京のほか、横浜、名古屋、大阪、インドにて「第2の会計事務所として会社を設立。経理部門へのスタッフ派遣・紹介など幅広い事業を展開し、グループ社員総数は360人になる。著書に『できる若者は3年で辞める!』『2008年版 図解インドの投資・会計・税務の基本』『母性の経営—management therapy』(共に出版文化社)がある。

しかし、今回の質問で非常に気がかりなことがあります。それは、「迷い」です。起業するにあたり、重要なことは「確信」です。自分が成功するという確信を持った経営者に迷いは生じません。行動したくて居ても立ってもいられない状態になるものです。人生の選択には、迷いが付き物かもしれません。しかし、起業家に迷いは不要です。迷っている時点で、起業家としては、時期尚早と言えるかもしれません。(このコーナーでは、経営に関するよろず相談を読者の皆様から受け付け、実践的アドバイスとしてお答えしております)